

C. ヒル氏の近著とそれについての論争

松 川 七 郎

ここでC. ヒル氏(以下「H氏」と略記)の近著というのは、C. Hill, *Intellectual Origins of the English Revolution*, Oxford, 1965, pp. ix, 333 のことである。本書については、その公刊以前から論争がはじまり¹⁾、現在におよんでいる。この小稿で、筆者は本書の内容とこの論争とをわかつまんで紹介し、簡単なメモをつくっておきたいと思う。きわめて豊富な内容をもつ本書と、重要な論点を数多くふくんでいる上記の論争とをこのわずかな紙数で紹介するためには「過度の単純化」の危険をあえておかすことにならざるをえない。この点をあらかじめお断わりしておきたい。

I 本書の形式的な主内容は、序文・序論(I)²⁾・本論(II-V)・結論(VI)からなりたっており、それに付論³⁾と索引とがついている。

H氏が本書に上記の書名をつけたのは、30年もまえに公刊されたD. Mornet, *Les Origines intellectuelles de la Révolution française (1715-1787)*, Paris, 1933 を「想起させる」ためであった。つまりMornetは、この著作でMontesquieu, Voltaire, Diderot, Rousseauらを論じつつ、フランス革命の知的諸起源を求めているが、H氏も、みずからの問題関心と方法とをもって、1640年にはじまるイギリス革命の知的諸起源をつきとめようとしたのである。というのは、17世紀イギリス革命には「知的諸起源がない」というのがイギリスの歴史家たちのいわば通説になっていた反面、H氏としては、「偉大なる革命は思想なしにはおこりえない」と考えたからである(1)。

1) 本書はH氏が1962年にオックスフォード大学でおこなった講義をもとにしたものであり、この講義の要約(したがってまた本書の要約)は、*The Listener*に1962年5~7月に掲載された。それが後述するような形で1964年から批判の対象になり、それを契機に論争がおこったのであって、「公刊以前から」論争がはじまったのはそのためである。

2) 本稿の本文中の括弧内のローマ数字は本書の各章を、またアラビア数字はそのページを、それぞれ示している。

3) この付論は、「A Note on the universities」(pp. 301-14)と題するもので、M. H. Curtis, *Oxford and Cambridge in Transition, 1588-1642*, Oxford, 1959へのH氏の批判と考えてさしつかえない。

そこで、H氏は問題をつぎのようにたてる。すなわち、ながいあいだ、「イングランドには国王や貴族や司教がおり」、全「国民の思考は国教会によって支配され」ていたにもかかわらず、1640年に革命がおこると、「10年とはたたぬうちに、国王に対する戦いは勝利をおさめ、司教や上院は廃止され、しかもCharles I世はその国民の名において処刑された。いったい人々は、どのようにしてこういう前代未聞のことをあえてするほどの勇気を身につけたのであろうか」と。いいかえれば、「人々は、簡単に過去と決別できるものではないし、かれらが伝統的に容認されてきた規範に挑戦するばあいには、かれらは必ずそれにかわって自分たちを支持すべきひとかたまりの思想をもっていなければならない」(5-6)からである。そしてH氏は、イギリス「革命に対して人心を準備させた思想のおそらくはもっとも重要な複合体こそピューリタニズムであった」、というのは、「神(King of Kings)の命令にしたがうかぎり、イングランドの国王にたちむかうこともできたはず」だからであるとし(6)、「本書において、私は“ピューリタン”ということばを、教会の改革を欲しながらも、(すくなくとも1640年以前には)教会からはなれたがらなかつた急進的なプロテスタントのすべてをふくむもの」(26)と定義するのである。

ところが、H氏は、本書ではピューリタニズムを「直接的」にはとりあつかわないと言う。そのわけは、「それだけが唯一の思想ではない」からである。では「その他の思想」はなにかといえ、それは革命以前(1640年以前)のイングランド社会における「中流階層('middling sort')、つまり商人・工匠・ヨウマンなどにうったえた思想」であって、これを問題にする理由の第1は、議会はかれらの支持なしには勝利しえなかつたからであり、その第2は、この階層の「数および富の増進こそ、1640年以前の1世紀間のイングランドにおける新しい社会的事実をもたらした」ものであるからである(6)。

これを要するに、本書におけるH氏の課題は、「クリトス教がはじまって以来最大の事件」(H. Butterfield)という評価さえあたえられているところの、「17世紀イングランドで完成した科学革命」(2)の諸起源を、上述の階層を中心としつつピューリタニズムとの関連において探

求し、テーゼを提起する⁴⁾、ということになるであろう。H氏は、この課題を、16世紀末から17世紀初頭にかけて「イングランドにおける第3の大学」(62)とよばれた首都ロンドンそのものにおける科学および医学(II)と、F. Bacon(1561-1626)における科学一般(III)と、W. Raleigh(1554-1618)における「科学・歴史および政治学」(IV)と、E. Coke(1552-1634)における法律(コモン・ロウ)(V)とを中心にしながら考察し、結論(VI)をひきだしている。このように要約したかぎりにおいても、「知的諸起源」がピューリタニズムという「宗教的諸起源」からいちおうきりはなして考察されていることがうかがわれる。ところが、宗教の世俗化という問題こそ、実はH氏がとりあつかっている時代の最大問題の1つであったのであるから、たとえピューリタニズムを「直接的」にとりあつかわないにしても、当然、上記の2つの起源は関連せざるをえないし、H氏もまた、本書の全章をつうじてこの関連を考察しているのである。

このばあい、H氏は、「自分の主張(case)を支持すると思われる証拠を選びだし」たが、そうだからといって「それに反する諸事実を削除したつもりとは毛頭なく」、ただ「(たとえば伝記的なこまかい点のような)‘neutral’と思われる諸事実はいくつも省略した」と言う(序文)。このことは、「私は全体として、科学者たちの思想がピューリタンや議会派の人々の立場に味方していたということを中心とするつもりである」(4-5)というH氏の本書をつらぬくテーゼとあわせて考えられるべきであろう。

H氏の主たる考察の範囲は、時期的には1560~1640年、つまりイングランドにおける絶対王制の最盛期から市民革命前夜までの80年間であるが、そのなかでも1588年におけるスペインの敗退から1640年における革命の勃発までの約50年間に力点がおかれ、この約半世紀を2分する時点に、1614年というRaleighの『世界史』(*History of the World*)の公刊年がすえられている。そしてこの年は、Elizabeth I世の治下における経済的知的生活の国民的高揚と、James I世の治世の後半以降におけるその後退・内省化および対外関係における国民的屈辱との、「先鋭に対照的な2つの時期」の分岐点として意味づけられているのである(10-13)。

II イングランドの首都ロンドンそのものが上記のように当時「第3の大学」とよばれたのが、2つの旧大学

4) H氏がこのようにいうわけは、本書が「講義をもとにしたものであり、そこではテーゼの提起が目的で、イングランドの知的歴史のスケッチが試みられたのではない」(序文)からである。

に対しての「第3」であることはいうまでもないが、それはむしろ旧両大学と対立した「第3」の存在であったところに、つまりその顕著な新興市民的性格に、大きな意味がみとめられる。ロンドンには、16世紀後半以来の、この国の資本主義的興隆にともなって生みだされた新型の「中流階層」またはより下層の人々、すなわち商人・工匠・職人・船員・砲手・測量家らの知的諸要求に応じる多くの私的な教育研究施設や医療施設がこの時期に創立された。そして、それらの中心をなすものは、T. Gresham(1518-79)の遺産にもとづき、「ローマ教皇の教義と戦うために」1598年に創立されたグレシャム・カレッジであり、神学・法学・修辞学・音楽・医学・幾何学・天文学の7講座を擁するこのカレッジの中心人物は、きわめて幅の広い科学者で、すぐれた組織者のH. Briggs(1561-1631)であった(34, 37)。R. Recorde, J. Dee, T. Diggesらの諸業績をうけつぎながら、W. Gilbert, E. Wright, J. Napier, E. Gunterらの諸研究を援助したのはBriggsであって、「グレシャム・カレッジが科学および成人教育の中心になった」のも、かれのもとにおいてである(17-46)。そしてこれらの施設における最大の特徴は、科学者と上述の「中流階層」の人々との協力であり、まさにこの点に、ロンドンの「科学と、ピューリタニズムと、議会派の主張とのあいだにおける関連」がみとめられるのである(21, 72-73)。いいかえれば、この時期における科学の担い手は、旧両大学の大学者たちからロンドンの商人や職人にうつり、教育も研究も、ラテン語ではなしに自国語でおこなわれ、実際の有用性にむすびつき、しかも宗教改革にふかく根ざしながら「権威へ挑戦する」ものになった(15-16, 22, 35-36, 65-72)。ところが、James I世の治世の後半になると、「the Modernsがthe Ancientsをしのいでいる」という考えかたそのものが危険思想視され、「無言の検閲制度」が実施され、科学の擁護者たちがロンドン塔へ送られるようになったのである(28-32)。

ところで、*De Magnete*(1600)の著者W. Gilbertは、「真の哲学者は、書物のなかではなくて、事物それ自体のなかに知識を求めるものだ」と言ったという。これを上述の諸点と考えあわせると、すでに「Bacon以前から知的革命についての記述が進行していた」のであって、Baconによる『産業交易誌』(*History of Trades*)の編さんの提唱も、実はこの時期の「第3の大学」における日常的な研究や実験の手続きの集大成を意図したものにほかならない(64, 73-74)。この意味において、Baconは「独創的な思想家」とは言えない(85, 289)。けれども、

カルヴィニズムの強烈な影響をうけていたかれの真の偉大さは、宗教から科学を分離しつつ、しかも純粹に宗教的な見地から、第2原因の探求(つまり自然研究)を道徳的に是認し、それによって科学者と「中流階層」との協力活動にきわめて包括的なプログラムと、それ自体の高貴さとをあたえ、「産業科学の哲学者」(B. Farrington)として未完の『大革新』(*Instauratio Magna*)を書きのこした点にある(87-88, 91-96, 298)。つまり、かれにとっては、宗教は科学に反するどころか、「自然的知識のいっさいの成果を手あつく保護すべきもの」であった(93)。「諸科学の真実で正当な目標」として Bacon がかけたと言われるあの 'utility' の思想は、後代「かれの名のもとに流布された狭隘な utilitarianism では」なかったからこそ、ピューリタンの支持をうけ、革命的意義をもちえたのであって、1640年における検閲制度の廃止とともにかれの諸著作が圧倒的な影響をおよぼしたのもそのためである(87-93, 112-13, 119)。日曜日の説教をグレシャム・カレッジ流の自然科学の講義にきりかえてしまえ、と要求した G. Winstanley は、「われわれが現世に天国でくらし(つまり地上で安楽に生活し)、来世にまた天国でくらしてもさしつかえないではないか」と問うたという(121, 125)。Bacon の政治経済思想が「かれが奉仕した国王たちのそれよりも議会派の人々のそれによりちかかった」のも、その根本は上述の特質に由来する(96-100)。かれの科学思想は、かれに最大級の尊敬を払った J. A. Comenius のそれとむすびつき、王政復古直後の「王立協会」となっていちおう結実したが、この反動期における Bacon の伝統は、王立協会よりも、むしろ国教反対者のアカデミーによって、より正しく発展されたのである(103-05, 125-29)。

宮廷人であったという点でも、James I 世の治下で失脚したという点でも、Raleigh は Bacon に似ている。しかも Raleigh は、「燃えるような愛国者であった」からこそ、「スペイン大使の要請にもとづいて処刑された」のである(131, 193)。Raleigh は「海賊」であったばかりではなく、科学者であり、歴史家であり、詩人でもあった(219)。科学者としてのかれは、なによりも航海術と歴史とに寄与し、政治学においては「議会の大権」を主張し、対外政策においては「スペインの領土には日没がない」と言った Bacon のそのスペインの「無敵性」に対するイングランド人一般の確信をくつがえして、イングランドをそれに代位させようとし、財経政策においては比較的公平な租税政策と自由主義をとまえ、宗教的にはピューリタンと関連をもちつつ、1689年に勝利したあ

の寛容を望見していたのである(132, 138-73, 224)。

ところで、本書の課題との関連における Raleigh のより大きな寄与は、かれが合法的に出版しえた唯一の著作としての『世界史』である。創生記に筆をおこし、第2次マケドニア戦争でその記述をおわるこの未完の大著は、序文でとりわけイングランドの中世史をくわしくとりあつかっているが、それらの記述をつうずる顕著な特徴は、F. Guicciardini, N. Machiavelli, P. Ramus および J. Bodin の影響をうけながら、かれが歴史に人間性をあたえたことにある(146, 149, 180, 185, 205)⁵⁾。しかもかれは、世界史における法則の存在を発見したのであって、このことは第1原因としての神の存在をみとめながら、第2原因における諸事実とそれらの因果関係の追究に努力を集注することを可能にしたのである(181, 196-97)。かれがこういう寄与をなしたのは、「Bacon をもっともよき師」(182)としたことによるところが大である。17世紀イングランドにおける歴史への関心は、この国における危機意識とむすびつき、そこでは「没落期社会の典型的イデオロギー」(E. H. Carr)としての循環理論(cyclical theories)が流布されていた(174, 183, 202)。ところが、かれの歴史観は、「歴史の流れにさからうことは致命的におろかなことだ」と主張しながら、この循環理論の打破を助けたばかりではなく、また当時の革命家たちを勇気づけたばかりでもなく、J. Harrington の歴史観に、ひいてはスコットランド歴史学派のそれにも、影響をおよぼしたのである(196-98, 203, 209, 298)。

III Elizabeth I 世の治下では法務長官をつとめ、1616年には高等法院長であった Coke は、「国王はなんの大権をもつものではない、もっとも、その国の法律が国王にそれをあたえているのなら別だが」と平然と言いきったという。Coke が王権神授説を主張する James I 世によって罷免されたのはこの年である(225, 246)。法制史家としてのかれの諸著作は「中世と近世とをわかつ分水嶺」をなすものであって、それらは「いくら高く評価しても過大ではない」とさえ言われているが、かれが最大の努力を集注した問題は、本来的には封建社会のなかで発達してきたイングランドのコモン・ロウを、資本主義の興隆にともなって生起する「商業社会の必要に応じうるもの」にすることであった(227, 256)。この努力

5) この意味で、Raleigh の『世界史』は中世的な歴史記述から近代的なそれへの「過渡的段階」を示すものだといわれている。J. R. Hale, *The evolution of British historiography, from Bacon to Namier*, Cleveland and New York, 1964, p. 13.

の結晶こそ、かれが編さんした13巻の *Law Reports* であり、これによってかれはイングランドの法律を体系化すると同時に、ノルマン・コンクエスト以前にさかのぼってこの国の基本法に関する「歴史的な神話」を英語で書き、征服王 William 以来の、ローマ教皇の支持者たちに対するイングランド人の勝利の記念碑がマグナ・カルタだということを明らかにしたのである(232, 256-57)。そして、たとえば「独占」という先例のない訴訟事件に当面すると、Coke はマグナ・カルタをたてにとり、イングランド人の「利益と自由」を擁護し、「怠惰」をいましめ、また同じ理由から、ギルドの諸特権、恣意的な課税や逮捕に反対し、宮廷や国教会と衝突する反面、当然にも下院の支持を求めたのである(233, 256)。Coke の法律論は、「市民の幸福」こそが法律の目的だという Bacon の見解を想起させる(263)。1641年、Strafford 伯の処刑を可決したその同じ議会は、Coke の遺稿の公刊を可決したが、かれが擁護した市民の財産権は、革命の進行過程において保守的なものになった、というのは、急進派の人々は、かれがマグナ・カルタのなかに読みとったのと同じように注目すべき結論を、かれ自身の諸著作のなかに読みとったからである(245, 260-63)。1650年、急進派の1人は、現在裁判官たちが「独占」している法律は、「どうすれば万人に 'common' なものたらしめうるであろうか?」と問い、また Winstanley は、'free commonwealth' では「売買がないのだから」、法律家などは1人もいらなくなる、と考えたという(261)。

結論(VI)の冒頭で、H氏は、イギリス革命の知的諸起源を上述の3人だけと関連させて論じることは、たとえこの3人の関心や影響のひろがりやを上述した程度に強調したところで不条理だとし、本書の課題を全面的に考察するためにとりあげるべき問題として、ルネッサンス以来の国内的な諸問題と、大陸からの諸影響とを列挙しつつ、かなりくわしく考察している(266-87)。

ところで、この3人の経歴には、奇妙に一致する点がある。すなわち、かれらはテューダー王朝における国王への奉仕からスタートしたが、初期ステュアート王朝の James I 世の治世の後半になるといずれも失脚し、その1人は処刑された。また、かれらは自分たちに対する世人の毀誉褒貶においても相似たものをもっていたのであって、以上の諸事実は、かれらが活動した旧制度のもとのイングランド政府が一枚岩のようなものではなかったという事実と表裏している(287)。とはいえ、本論の考察をつうじ、かれらが人心を過去から絶縁させ、旧秩序の永続性についての伝統的な確信をほりくずしたその

道は示唆されたであろう。つまり、かれらはたとえ完全に独創的な思想家ではないにしても(たとえば Bacon の背後には P. Ramus の影響をうけた旧大学や、ロンドンの職人や科学者がいた)、その活動をつうじ、人民大衆が模索していた方向を明確に指示したのであって、これこそが歴史的偉人の定義なのである(288-92)。

しかもかれらは、ピューリタンと共通する敵をもっていた。すなわち、放縦で浅薄な、ますますローマ教皇に好意をよせる宮廷、スペインに好意的で、買収されていた貴族たち、教育や海外発展に不熱心な政府、政府を支持するための歴史研究の利用、私人の企業への干渉、高位聖職者たちの愚劣なふるまい、がそれである。けっきょく、H氏は、ピューリタニズムを「直接的」には論じないことにして出発したけれども、ここでふたたびそれを論じることになり、厳格な禁欲主義にとりつかれた19世紀の意味におけるピューリタニズムは、1660年の王政復古後の産物であって、革命前のそれはけっして世俗的関心を排除するものではなく、「17世紀の 'ピューリタニズム' が宗教や道徳に局限された狭義のものでなかったのは、[この時代の]科学や歴史が狭くしい '世俗的' な問題でなかったのとまったく同じである」(289, 293)。これを要するに、ピューリタニズム・科学および歴史の関連は、1) 権威よりも経験を、2) ことばよりも事実を、3) 現実からかけはなれた知的活動ではなくて、感覚や良心によるテストを、4) 前例よりも理性を、重視する点に存する(295-96)。ピューリタニズムが包摂していた思想のなかには、中世的なものもふくまれていたけれども、16世紀後半以降における顕著な変化は、「第3階級」の勃興であり、それによってピューリタニズムが「ブルジョアの諸徳」とむすびついた点にある(298)。けっきょく、「歴史はあらゆるものの関連」であり、「この複雑きわまる相互関連をみきわめる英知」に問題解決のかぎがある。H氏は、科学・歴史および法律を論じつつくりかえしピューリタニズムにもどらざるをえなかったことを強調し、これらの分野における闘争は、その「社会における社会的政治的闘争に関連し、したがってまた、それらは単一の革命におけるさまざまな局面であるように思われる」と言ってその結論をおわっているのである(299-300)。

IV H氏の結論は、同氏がいうように「陳腐で、果てもつかぬもの」(299)かも知れない。けれども、H氏が「恣意的に選んだ」(291)という上述の3人の人物を中心とする全考察を追ってゆくうちに、これらの人物は「その先行者にとほしい」17世紀イギリス革命(4)の知的諸起源の中心的存在としての客観性を濃くするように考え

られる。いいかえれば、たとえ「イギリス革命の Rousseau はいない」にしても、より minor な人物はいたのではないか(1-2)という H 氏の問題は、この考察をつうじ、たとえ完全ではないにしても解かれ、本稿の冒頭で紹介した「通説」は、このかぎりにおいて破られていると考えてさしつかえなからう⁶⁾。

ところで、本書についての上記の論争は、*Strafford in Ireland, 1633-1641: A Study in Absolutism* (1959) の著者で、ダブリン大学の Dr. H. F. Kearney (以下「K 氏」と略記)と H 氏とのあいだのそれである⁷⁾。この論争を説明するためには、まず諸論点を刻明に紹介するのが当然の順序であるが、小稿の紙数はとうていそれをゆるさない。そこで、H 氏の立場や論旨は上述したかぎりでもちおう明らかにされたことにして⁸⁾、K 氏の立場を理解するのに役だつと筆者が考える諸点をまず述べておこう。すなわち K 氏は、1)「17 世紀社会を進歩的諸要素と反動的諸要素とに区分する」H 氏の考えかたに「ついて行けない」人であり (No. 31)、2) 科学史と一般史とを区別し、前者の研究方法として、a) 個々の天才の役割を重視する方法、b) 科学の進化論的性格を重視する方法、c) マルクス主義的方法をもふくめた社会学的方法、の 3 者を考え、みずからをそのいずれにも属させず、3)「17 世紀科学革命についての研究は、歴史家が Copernicus または Galileo についての“諸事実”をとりあつかうことを要求されなくなったここ数年まえから、詭弁の場になってしまった」と考える人である (No. 28)。

このような立場にたつ K 氏は、H 氏の本書および前 2 著を「科学を一般的な社会現象とし」、したがって「科学史を一般史のなかにひき入れた」ところの、「衝撃」的な著作と考え、本書に対しては、1) グレシャム・カレッジの性格、2) 科学の興隆に対する商人や工匠の役割、3)

Bacon の諸思想、4) 内乱およびピューリタニズムの知的意義、の 4 点について批判し、最後に Gelder 教授のいう 'Major Reformation'⁹⁾ をもあわせ、問題をヨーロッパ的規模において考察すべきことを主張した (No. 28)。これに対し、H 氏は K 氏のこの最後の主張について形式的に同意しただけで、他の諸論点をピューリタニズムと科学の 2 点にしぼりながら、K 氏の批判を全部的に否定した (No. 29)。ところが、K 氏は、H 氏がしぼった上記の 2 点を「定義の諸問題」としてとりあげ、H 氏を再批判しているのである (No. 31)。H 氏がこの批判に答えるかどうかはわからないが、以上の論争をつうじて、歴史的な諸事実、その選択、その解釈、(とりわけ 17 世紀における) 宗教と科学、科学と社会、科学史とその他の分野の歴史、等々、総じて歴史的研究一般につながるきわめて重要な問題が提起されているように考えられる。

H 氏によれば、けっきょく K 氏はピューリタニズムと科学との関連を否定しているのであって、これは最近とりわけアメリカで流行している見解であり、また K 氏の立場は「歴史における意味ふかい諸関連を確立しようとせず」、「つぎつぎにものごとを論難する歴史的ニヒリズム」だと言う (No. 29)。このばあい、「意味ふかい諸関連」とはなにが当然問われるであろうし、また H 氏としては、本書の全体をつうじてそれを「確立しよう」としたのであろう。それはともかくとして、筆者は、H 氏が本書の結論で歴史研究における 'departmentalization' に反対していることや (300)、この論争で述べているつぎの「確信」はきわめて適切であると思う。すなわち、それは、「社会を全体として見ること」、いいかえれば、「人間の業績や思想を、まるでそれらが個々別々の、独立した個室のなかに存在しているかのように考え」ない (No. 29)、ということなのである。

6) 本書についてのがわが国での書評としては、『歴史学研究』No. 307 (1965 年 12 月) 所収の浜林正夫氏が筆者の知るかぎり唯一のものである。「階級闘争史観」にたつ同氏のこの書評にはここではふれない。

7) この論争は *Past & Present* 誌上でおこなわれているが、それを発表順に記せばつぎのとおりである。Kearney, "Puritanism, Capitalism and the Scientific Revolution" (No. 28, Jul., 1964.) Hill, "Puritanism, Capitalism and the Scientific Revolution" (No. 29, Dec., 1964.) Kearney, "Puritanism and Science: Problems of Definition" (No. 31, Jul., 1965.) 以下の括弧内の号数はこの雑誌のそれを示す。

8) H 氏の立場を理解するためには、同氏の「イギリス革命研究の方法と問題」(『土地制度史学』第 16 号, 1962 年 7 月) がひじょうに参考になる。

9) これは、H. A. E. van Gelder, *The two Reformations in the 16th Century*, The Hague, 1961 におけるこの著者の造語で、ふつうの用語での宗教改革を 'minor' と考え、ルネッサンス以来のヒューマニズムの運動を 'major' と考えるものらしい (*Ibid.*, pp. 3-9.) なお、松浦高嶺氏は、H 氏は K 氏が「提示した "Major Reformation" には言及していない」といっているが (『経済学史学会年報』第 3 号, 58 ページ)、筆者は H 氏が「ヨーロッパ的規模」における問題の考察において K 氏に同意している個所 (No. 29) で、(たとえこの用語そのものを用いていないにせよ) 事実上これに「言及」していると思う。この 'Major Reformation' という用語が現在どの程度の市民権を学界でもっているのか、また H 氏がこの用語そのものをみとめているのかどうか、いずれも筆者には大いに疑問である。